

## (2)輸血検査室

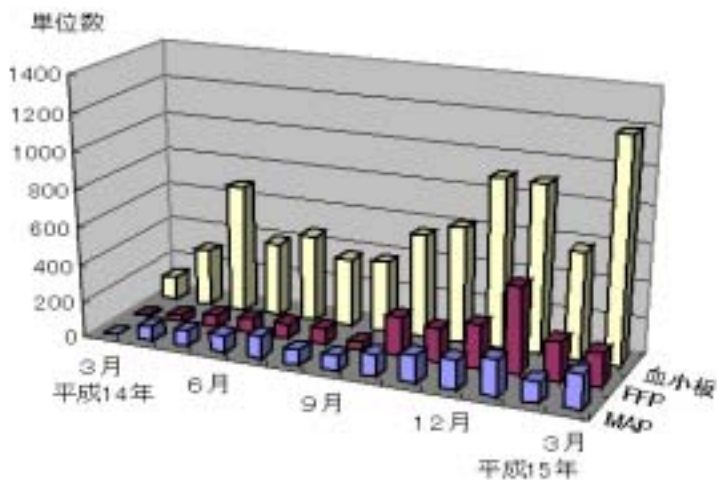
輸血検査室は、組織としては独立部門ではないが、輸血関連の検査から自己血を含む血液製剤の管理・放射線照射の業務を一元的に担当している。当初から輸血療法委員会を立ち上げ、関連部署、各科からなる委員と問題点を検討し、院内回覧板で周知徹底につとめている。平成14年6月には、骨髄移植バンクからの非血縁者ドナーの受入れ機関として認定され、ドナーが1名入院、骨髄採取をおこなった。また、本院の電子カルテシステムと連携した輸血部門システム・BLADを導入しバーコードによる認証システムが運用されていることも特徴である。これにより、リスクが最も高いとされている患者や製剤の「取り違い」事故の防止が可能である。

平成14年3月から平成15年3月までの、日赤からの血液製剤の使用状況、赤血球MAP使用量と日赤へのMAP返品率の推移について図に示した。血液製剤の使用状況は当センターの病院機能の充実とともに増加がみられ、輸血関連検査件数の推移においても、開院直後と比較して約3倍の伸びを示している。日赤へのMAP返品率については、輸血療法委員会を通じての各部門の努力により、一時40%台であったのを6%台にまで下げることが出来た。

これだけの業務をおこなうために技師1人では足りないため、15年度には増員が望まれる。また、末梢血幹細胞輸血や成分輸血を行なうために、成分採血室が隣接しているが、輸血検査室医師は血液科と腫瘍科との併任で、専任技師もいないために成分採血は8階西にておこない、移植用の血液の処理も8階で行なっている。今後は輸血部門の独立が望まれる。

(輸血検査室長 恒松由記子)

### 血液製剤使用量(H14.3~H15.3)



### 赤血球MAP使用量と返品率の推移 (H14.3~H15.3)

